

留学生の声

塾内在籍校・学年(派遣時)	慶應義塾高等学校 2年
留学先校名	Shrewsbury School
留学期間	2019年8月から20年6月まで

なぜ留学を志しましたか？また、留学を志した時期はいつ頃ですか。

普通部に在籍していた際に先生方からこの制度について伺いました。当時は海外に行ったことがなかったのでパスポートも持っておらず、留学についての実感はありませんでした。高等学校に入学し、3年間のうちに何かを成し遂げたいという思いがあり、応募を決めました。理由の1つは、私が普通部の3年間で盆栽の研究をしており、国や地域によって作風が異なることに気づきました。「美しい木の形」という事を通して世界の多様性を見たことが留学を通じた文化交流を志すきっかけとなりました。

高等学校における英語のクラスは上級ではなく標準クラスであり、準備のために英語を学習しましたが、その際にニュースや本は物事の切り口が日本と異なるようだと感じました。留学して多様な考えをくみ取り、受け入れることを目指す、という目標もできました。

留学に向けて、どのような目標を立てましたか？

留学先の特徴を踏まえて、以下の2つの目標を立てました。

1. 豊富な教科当たりの授業数を活かして暗記のみならず、基本の考え方を理解し、普遍的、汎用的なものの考え方を学ぶ。
2. 寮生活を通してスポーツ、教養等の人格的側面を身に着けること。集団生活において相互の交流は欠かせず、広く人と話せる教養・そのための言語・心身を鍛える運動・それをボーディングスクールの多様性の中で、そして寮の中で集中的に身につける。

留学先では、期待どおりの生活を過ごせましたか？

当初は全く英語が通じず、会話が全く続かないというところから留學生活は始まりました。授業について行けるかが心配でしたが、それは比較的早く慣れることができました。寮長先生の授業では先生の英語を寮でも聞いているのですぐに耳が慣れてきますが、苦労したのはビジネスの授業でした。先生が説明する時間、生徒の質問、ビデオを見る時間など様々あり、また板書が筆記体で読めなかったので混乱していました。そのうち、1か月ほどで授業が分かるようになり、2か月ほどで発言ができるようになるなど自分の変化が感じられるようになると、大変うれしく感じました。次へのやる気になったことは決して忘れません。

しかし、授業が分かるようになっても、なかなか友人との会話が続きませんでした。特に食堂の円卓で話すのは難しく感じたので、寮から食堂への移動中に誰かに話しかけていました。じっと私の英語の分かるまで聞いてくれた友人とは、素晴らしい関係を築くことができました。ただし、食堂の行き帰りのみでは話す機会が限られるので、授業や寮において自分から発信することも心掛けるようになりました。見てわかるものが良いと思い、興味のある内容の本を寮のホールへ持って行って読んでいると興味のある友達が話しかけてきてくれたことで、会話が始まったこともありました。

強く印象に残っている催しの一つに、「ハウスダンス」があります。これは、寮で2年に1度開催され、他の寮の生徒を招待できるパーティーの事です。その際に周りの友達の間で私を胴上げしようということになり、胴上げしてもらいました。胴上げしてもらった理由は分かりませんが、パーティーの賑わいの、しかもその中心に加わったことはこの上ない喜びでした。後日、図書室で話したことがなかった生徒に胴上げの感想を聞かれた他、パーティーにはいなかった友人にも「胴上げされたんだって？」と言われるなど、ふとしたことから新たな交流も生まれました。その友好的な雰囲気が、Shrewsburyの良いところだと思っています。

また、学業面では、ビジネスの授業が当初は理解できず課題で10点中3点がつくなど大変でしたが、練習と質問の積み重ねにより学年末試験では良い結果を修めることができ、先生からは'One of the highest marks'だったというお褒めの言葉を頂きました。結果が出ていない状況でも、努力や挑戦を見守って下さる環境であったからこそだと思います。化学においては、学年で1人に授与される Lower Sixth Chemistry Prize を頂きました。

授業について

Sixth form では 3 教科又は 4 教科を学習します。各教科週に 8 コマ (1 コマ 40 分) ずつ、先生は 2 人ずついらっしゃるの、1 週間で先生 1 人当たり 4 コマということになります。以下、各授業について紹介致します。

生物

豊富な授業時間を活かし、広く深く学ぶことができました。授業の形式は、先生によって大いに異なりました。講義がすべてビデオになっており、あらかじめ視聴してから実際の授業に臨む、という授業を展開される先生や、ほぼ毎週実験をする先生がいらっしゃいました。ただし単元によっては実験が難しいので、その場合は「ビデオ制作」等の作業があります。

生物ではラテン語由来の単語も多く、また元々覚えることが多いので、私が最も苦勞した教科の一つです。他の生徒は生物用語の一部を Sixth form 以前の教育課程などで学習済みなので、知識に差を感じることも多かったのですが、生物用語集を購入して読み込んだ他、その都度授業中に質問して解説して頂けたことで授業についていくことができました。私は授業中の質問ができるようになるまでに 2 か月かかりましたが、どの教科でも 10 人ほどの少人数授業であるため一度発言してみるとあまり緊張しないことが次第に分かってきました。また、1 人の質問からほかの生徒の質問が派生し、議論が深まることもありました。1 年の中で、細胞内の仕組みから組織の構造まで、幅広い内容について既習事項を活かしながら深める授業が展開されていることが印象的でした。生物の学習を通して、覚えるのみではなく仕組みを理解して応用するということが身につきました。苦勞したものの、同時に得られたものも大きかったです。

化学

生物と同様、実験を多用した授業でした。1 学期中間以降は無機化学、有機化学をそれぞれの先生が教える形式となっていました。

習熟度別のクラスで、当初は上から 2 番目のクラスでしたが 11 月の試験後、最上級のクラスへ異動になりました。慣れないクラスへ異動することへの戸惑いもありましたが、折角なのでさらに自分を磨こうと思い直しました。上級クラスは講義中心で、授業中の演習が少なく、宿題が多くなりました。板書量が多く、小テストも頻繁にあったため復習は欠かせませんでした。大変充実した時間となりました。授業以外にも Chemistry Olympiad を受験することができる他、Chemistry Trip として大学での講演を聴きに行ったこともあり、授業以外にも学んだことを活かす機会として用意されているように感じました。

ビジネス

ビジネスは、主に企業の内部構造について学ぶ学問です。学習する分野は多岐にわたり、企業の形態、リーダーシップ、経理、製造、人事等を学習し、実際にその知識をケーススタディーに応用することが求められます。授業はほとんどが先生の講義でパワーポイントが多用され、また具体例をつかむためにビデオを視聴することもあります。ビジネスでは、エッセー問題 (長文) は満点が主に 3 種類あり、点数に応じて書くべきエッセーの構造が決めており、それを会得するための練習も重要です。当初私は英語でエッセーを書くことに慣れず、学習事項をどのように応用するのか分かりませんでした。そのため 10 点満点の課題で 3 点を取ったことがあり、このままではいけないと思い、毎日のように 20 点満点の長文エッセーを書く練習をしました。先生は、授業内、また授業後にも質問に答えてくださった他、私が練習で書いたエッセーも採点してくださるなど、大変お世話になりました。このような練習やご指導に加えて、授業が進み既習事項が増えたことでも、少しずつ論理を組み立てられるようになったように思います。

DT

DT では学期ごとにそれぞれの先生から 1 つずつ主題が与えられ、その過程をスケッチブックに取り組みます。1 つのプロジェクトは 4 つの段階に分かれています。Research, Experiment, Development と Realise です。1 学期のプロジェクト、Organic jewelry を例にとって説明すると、まずオーガニックデザインとは何かを調べ、実例を見ることから始まります。資料を用いて具体例を集め、スケッチブックに写真をたくさん貼ります。この段階では個々の製品の分析はせずに全体像をつかみました。私は実際の製品の例を集めたほか、草木を観察するとともに、それらがどのように抽象化されてきたかを調べました。例えば、日本の欄間の彫刻や蒔絵、屏風絵に描かれた松や燕子花などを参考にしました。また、日本を含めた世界の模様についても調査を行いました。そのうえで様々な樹の樹皮の観察に出かけ、それを模様にしました。Experiment では、4 つの素材、木材・プラスチック・金属・紙繊維の基礎的な加工技術について実習があり、過程等を記録します。学校の設備が充実しており、またクラスも少人数のため、道具や機械を使うために長時間並ぶような事はありませんでした。ところで、DT の授業中は生徒同士の会話も活発で、仲間から刺激を受けるのは重要なことです。私は英語が分からないのでなかなか輪に入れず、苦勞しました。しかし DT はモノを作る教科なので、技を見せ合うことはできました。私はクラスで折り紙

慶應義塾一貫教育校派遣留学制度

を皆に教えたほか、一辺 2.5cm の折り紙で鶴を折って拍手を頂いたことがあります。羽が伸びる鶴を折って教室に飾って頂いたり、組紐を作ったりしたこともありました。特に、この DT においては、自分から技法や発想を発信することが求められていたと思います。さて、Development ではこれまでの情報を総合して作品の構想を練り、たくさんのスケッチを行い、そして Realise では作品の制作を行います。私は連鶴を用いたブローチを制作しました。紙を選んだ生徒は他にいませんでしたが、防水性・耐久性への不安がある中で試行錯誤した結果、実用に足るものを完成できました。発想を形にし、試行錯誤することができる DT の時間は、大変貴重なものであったと感じています。

宿題について

総じて、宿題の分量については明らかに在籍校より多いです。1 学期、曜日によっては 1 日 7 時間ほどを宿題に費やしました。その後効率は上がりましたが、私の目安は最大 1 日 4 時間でした。寮では就寝時刻が設定されており、夜遅くに課題ができないので効率よく進める必要があります。私は朝早く起き、朝食前の時間を寮にある宿題用の部屋での勉強に使っていました。課題を終わらせるまでの期間についても、自分の中で規則を定めて進めました。

リモート授業について

録音または録画されたパワーポイントが配布され、また Zoom を用いた授業が行われました。宿題の内容は、平常授業と特に変わりません。ただし、量は少なくなりました。DT については実習が難しいため、スケッチブック主体の進行となりました。また、生物では実験の動画が配布され、それを視聴しながら結果を記録し、レポートを記述しました。課題の提出も慣れるにしたがって苦ではなくなりました。しかし、時差の関係で少し一日の計画が立てにくいことは感じました。また、遠隔授業下でも課外活動が Zoom 等を用いて継続され、私は積極的な参加を心掛けました。

今後の派遣留学生へのアドバイス

日本のことを海外で発信したいとお考えになる方も多いと思います。私の尋ねられた質問に、「日本に行ったら、何ができますか」というものがあります。具体的な質問をされることを想定していた私は、その質問をされた際に少し戸惑いました。その時は私の好きな日本文化・盆栽について話しましたが、写真を見せるくらいしかできませんでした。この経験を通して、自分の伝えたいことをより強く持つべきであったと感じました。また、自分からの発信を繰り返すことで、次第に興味を持ってもらえる点が分かってきました。

日本について知ることに加え、発信の仕方まで準備されても良いかもしれません。あなたは日本の何を伝えたいですか。あなたの好きな日本は何でしょうか。文化と生活のつながりなど、日本に住んでいて、身近に触れてこそわかることをお考えになっても良いかもしれません。



以上